

ICUにおける家族面接について

Nursing Interview with Patient' Family in Intensive Care Unit

集中治療部・救急部：村田 幸代

西8階：上條 薫

要 約

当ICUでは、3日以上入室している患者家族に、受持ち看護婦が、面接を行っている。看護婦は、面接により、通常の面会時間では得られなかった患者の情報や家族の思いを知り、患者、家族ケアに生かせていると評価している。しかし、面接に対する家族の評価は検討していなかった。そこで、家族が、面接をどのように受け止めているのか明らかにするために質問紙調査を行った。

1995年4月から1996年3月までに面接した家族50名を対象とし、郵送による質問紙調査を行った。回答の得られた25名について分析した結果、①面接を受けた家族の96%が面接を受けてよかったと答えていた。②面接時間の長さ、時間の設定については、91%が満足していた。しかし、面接の回数については、満足している人が35%にとどまった。③家族の面接における不安、緊張は強い傾向にあった。④環境への配慮、家族への心理的配慮・尊重、看護婦の対応についての評価は、高い傾向が認められた。

面接は、家族に受け入れられていたが、緊張緩和の方法や内容、面接の回数について検討する必要がある。

キーワード

看護 ICU 家族 面接

〈はじめに〉

近年、患者を含めた家族への看護が重要視され、家族援助の一手段として、面接の有効性が報告されている。従来より、集中治療部では、1日3回30分ずつの面会時間を設けている。(文献-1)我々は、この面会時間の関わりだけでは、家族の思いや要望が表出しきれず、具体的な家族援助につながっていないのではないかと考え、1995年より、3日以上入室している患者の家族に対し、受持ち看護婦が面接を行ってきた。(表1)看護婦は、面接することにより、通常の面会時間では得られない患者の情報や、家族がかかえている不安を知ることができ、患者や家族援助に生かせていると感じている。(文献-2)そこで、今回、医療者側の一方的な評価ではなく、家族が面接をどのように受け止めているかを明らかにし、今後の方向性を見出すために質問紙調査を行った。

〈対象と方法〉

1995年4月から、1996年3月までに、ICUに入室し、面接を受けた患者家族50名を調査対象とし、郵送による質問紙調査を行った。調査内容を表2に示す。

〈結果〉

50名中、25名の回答が得られ、回収率は50%であった。このうち有効回答23名（緊急入室12名、予定入室11名）について検討した。その23名の属性を表3に示す。面接時間の長さについては、91%が満足していた。時間の設定については、91%が都合のよい時間であると回答していた。しかし、回数については、39%が少ないと答え、満足している家族は35%にとどまった。(図A)

家族の不安、緊張については、35%が、面接が始まる前に不安があると答えており、56%が、面接中に緊張したと答えていた。また、26%が複数での面接を希望していた。(図B)

家族への心理的配慮、尊重については、「ゆっくり話ができた」「不安に思っていることを聞いてもらった」以外は、70%以上が、よいと答えていた。(図C)

環境への配慮については、83%が、別室でよかった、74%が、静かな環境だったと答えていた。(図D)

看護婦の態度、対応については、91%以上がよいと答えていた。(図E)

面接については、96%が受けてよかったと答えていた。自由記述では、過半数が、「不安がやわらいだ」「気持ちがやすらんだ」と答えていた。(図F)

〈考察〉

田辺らは、危機段階の承認期にある家族への面接の必要性と、直接質問法による面接の有効性を述べている。(文献-3・4)我々は、モニターの重症患者家族ニード(文献-5)の中から重要と思われる10項目を選択し、面接技法の基礎知識(文献-6)を参考にし、患者家族への面接を実施してきた。今回、現在行っている面接の評価を得るために、患者家族へ質問紙調査をした結果、面接の有効性と、改善点が明らかになったため、考察を加える。

面接の時間設定、長さについては、ほぼ満足する評価が得られていた。しかし、回数については、満足していた割合が、35%と低い傾向にあり、面会時間が制限されている現状で、家族は、看護婦と対話する機会を望んでいることが分かった。このことから、患者の入院形態や、病状の変化、面会時の家族の様子に応じて、面接の回数を増やしていく必要があると考える。

環境への配慮や、看護婦の態度、対応については、満足できるという評価が得られていたが、面接における不安や緊張は、強い傾向にあった。これは、原因として、面接の目的の説明が十分ではなく、家族に理解されていないことや、複数の家族で受けられるような、面接設定にかけていたことが考えられる。このことから、わかりやすく面接の目的を説明し、不安がある場合は、他の家族がいる時間に合わせるなどの配慮をし、落ち着いて面接が受けられるようにする必要があると考える。

心理的配慮については、「ゆっくり話ができた」「質問しやすい雰囲気だった」「不安に思っていることを聞いてもらった」の3項目の評価が低い傾向にあった。これは、面接方法が、5段階評定の質問形式であったため、家族が気持ちを表出するような内容に乏しかったためと思われる。また、看護婦側も、家族の精神面を表出できるような、面接の誘導の仕方に欠けていたと思われる。

現在の面接は、質問項目以外は、看護婦個人の対応にまかせているため、今後は、面接についての知識を深め、統一見解が得られるよう、学習会をもつなどし、面接技法を高めていく必要がある。

面接については、96%が受けてよかったと答えていた。また、「面接後、不安や気持ちがやわら

いだ」「面会時間に質問しやすくなった」などの自由記述から、面接は、家族に受け入れられており、家族との関係を円滑にし、信頼関係をつくるきっかけになっていると考える。限られた面会時間だけでは、把握しづらい、家族の抱えている不安や問題を、早期に明確化し、効果的な援助を行うために、面接は、重要な一つ的手段だと考える。

今回明らかになった問題点を検討し、家族援助を充実させるために、今後も面接を実施していきたい。

〈まとめ〉

ICU入室中に面接を受けた患者家族に対し、アンケート調査をした結果、面接は、家族に受け入れられていた。また、面接時間、時間の設定、環境、看護婦の態度については、高い評価が得られた。今後は、面接の回数、面接時の人数、対応の仕方について、検討する必要がある。

〈文 献〉

- 1) 宮本夕香, 高野佐江子, 二木朗江: 面会時の援助についての検討
Emergency Nursing 4 (6), 483-487, 1991.
- 2) 小出淳子, 内田 緑: 家族の看護計画の検討—家族の看護計画立案を試みて
信医病看研集, 26: 5-10, 1996.
- 3) 田辺弘美, 青木里美, 加藤智子他: 救命救急センターにおける家族援助について
看護面接をおこなったの考察 北里病看研集 16: 70-73, 1992.
- 4) 松本文子, 見城晶子, 田辺弘美他: 救命救急センターにおける家族援助について
看護面接における直接質問法の有効性 北里病看研集, 17: 113-123, 1992.
- 5) Molter NC (常塚広美訳): 重症患者家族ニード, 看護技術30(8): 137-143, 1984.
- 6) 幸田るみ子: 面接技法の基礎知識, Emergency Nursing 6 (6): 50-54, 1993.

表1 〈面接方法〉

対 象：3日以上ICUに入室した患者の家族

面接者：受け持ち看護婦

時 期：ICU入室後3～5日目

場 所：ICU病棟外の別室

時 間：30分程度

回 数：1～2回

内 容：モルターの重症患者家族ニードに基づき10項目を中心に質問する

表2 〈研究方法〉

調査対象：1995年4月～1996年3月までに

ICUに入室し面接を受けた患者家族50名

調査方法：郵送による質問紙調査

調査内容：時間、回数、時間設定、内容の理解、

面接における家族の不安、緊張、

環境への配慮、

家族への心理的配慮、尊重、

看護婦の態度、対応

表3 〈調査対象の属性〉

性 別：女性 17名 男性 6名

患者との関係：父親 2名 母親 5名 子供 6名

夫 2名 妻 5名 祖母 1名

回答なし 2名

入院診療科：心臓外科 11名 脳神経外科 5名

肝移植外科 4名 循環器内科 2名

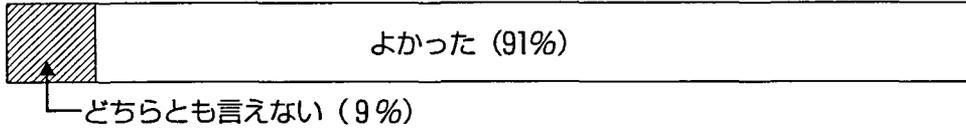
その他 1名

入院形態：予定入院 11名 緊急入院 12名

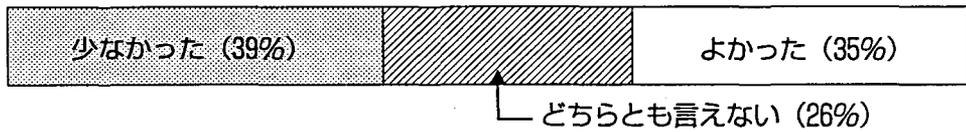
平均入室期間：13.0日

A [面接の設定]

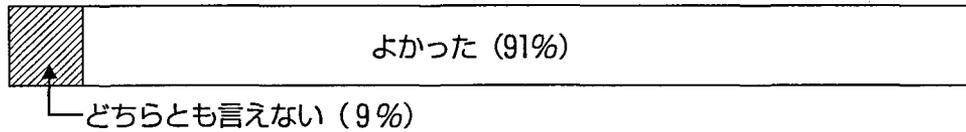
時間の長さはよかった



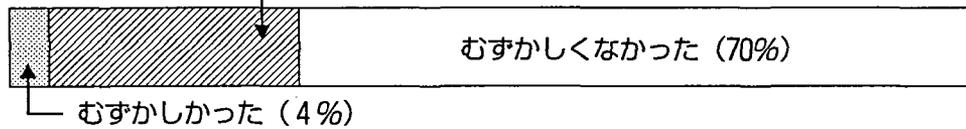
回数は少なかった



都合のよい時間だった

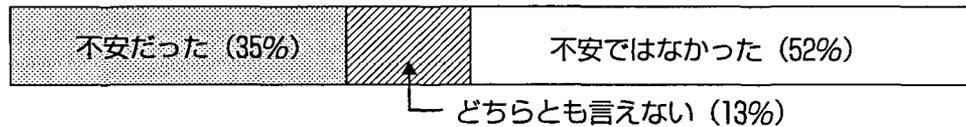


話はむずかしかった



B [面接における家族の不安・緊張]

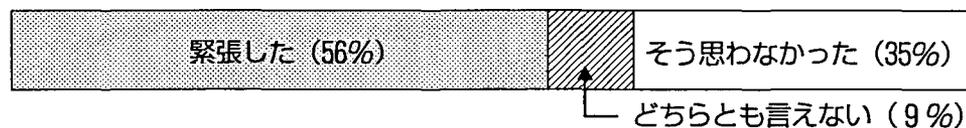
何をされるのか不安だった



他の家族も一緒の方がよかった

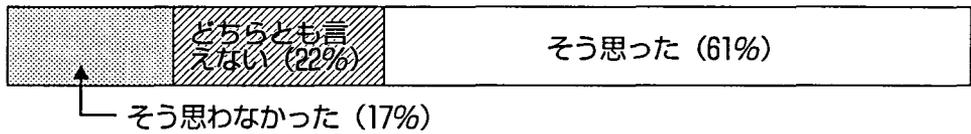


緊張した

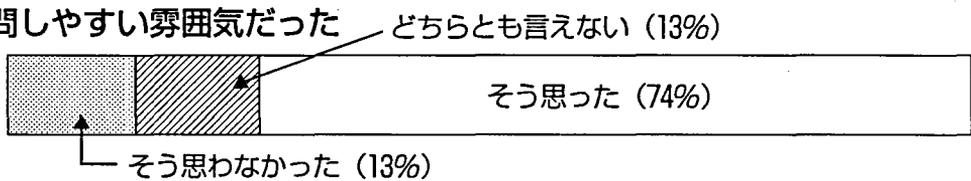


C [家族への心理的配慮・尊重]

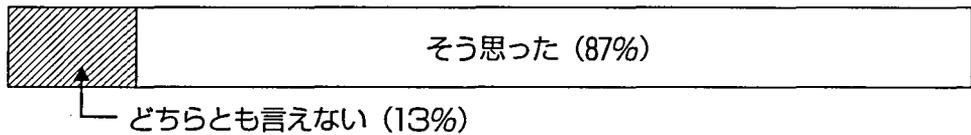
ゆっくり話げできた



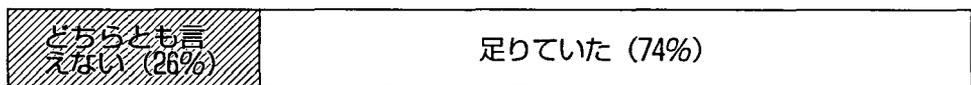
質問しやすい雰囲気だった



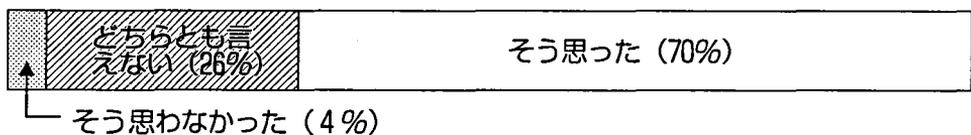
家族のことを気にかけていた



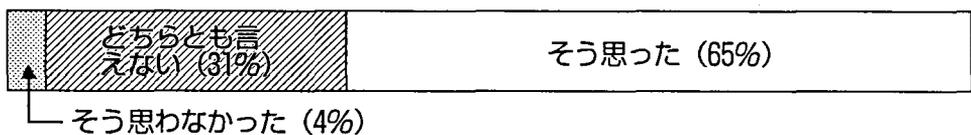
説明は足りなかった



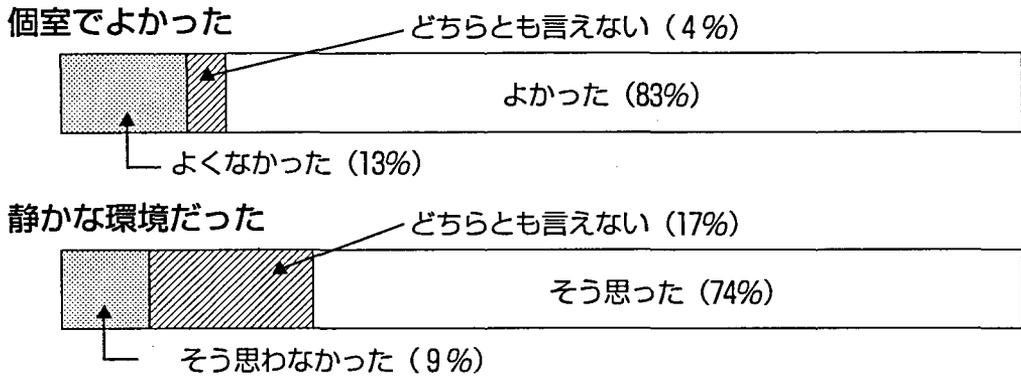
希望が看護婦に言えた



不安に思っていることを聞いてもらえた

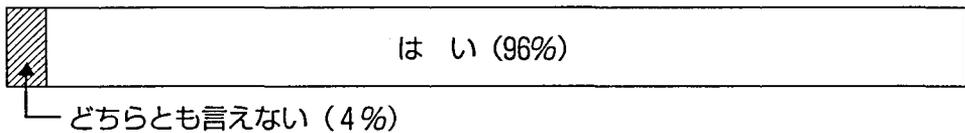


D [環境への配慮]

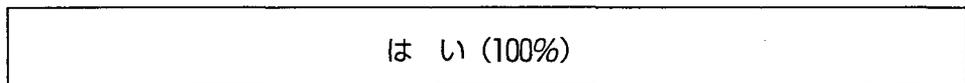


E [看護婦の態度・対応]

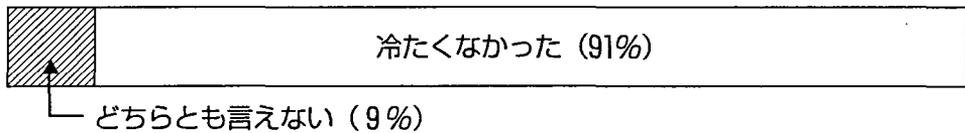
面接の目的を話した



質問に丁寧に答えていた



話し方・態度は冷たかった



F [面接を受けてよかった]

